

『日華之実業』解説・目録

広川佐保

I 『日華之実業』を巡る人々

本稿は、1910年代後半に日華実業社により刊行された月刊雑誌『日華之実業』（定価：30銭）の解説、および筆者所蔵分の目録紹介である¹。『日華之実業』の創刊は、おそらく1917年頃と考えられるが、発刊の契機について、同誌第3巻第4号（1919年4月）「社告」において、東部シベリア、北満洲、モンゴルを、将来的な邦人の「発展地」とみなしたうえで、「我社ハ夙ニ眼ヲ東亜ノ対局ニ注ギ、日支ノ親善ト経済聯契トヲ鼓吹シ、達成セシメンカ為メ、毎月、日支両文ヲ以テ機関雑誌『日華之実業』を発刊したと述べ、「対支経済雑誌」と自称していた。同雑誌の編集には、主幹の加藤青風（政吉）、編集長の井口靈堂、記者として深谷佐市（号：松濤、以下同様、省略）、古川狄風（法信）、林餐霞、加藤士郎（耕雲、のち従軍）、若月胤行、そして華文主任には李長春（日華実践学校長）などが所属していた。このうち加藤と深谷は『東三省官紳史』（大連、1917年）の著者である。また、深谷と古川は、福島県須賀川市出身の兄弟であり、弟が古川家の養子となっている。古川は、福島師範学校簡易科卒業後、小学校教員となるが、その傍ら小松竹逸に師事して絵画を学んだ。その後、古川は教員を辞め、中国で雑誌記者をしていた深谷のもとに向かう。二人は、中国東北やシベリア、モンゴル、朝鮮半島を取材し、兄が文章を記し、弟が絵画を担当して、『満蒙探検記』（博文館、1918年）として刊行した²。

また、同雑誌の顧問には、美和作次郎（？～1943：第8代玄洋社社長）、客員顧問として白河次郎（鯉洋、1874～1919：新聞記者、中国文学者、政治家）、鶴崎鷺城（1873～1934：新聞記者、評論家）、結城琢（蓄堂、1868～1924：漢詩研究）、小川運平（柳坡、1876～1935）、今川宇一郎（蓼峰）など、中国や朝鮮の歴史、文化に精通した人物が名を連ね、今川などはしばしば同誌に寄稿していた。そして一時的ではあるが、上田黒潮、渋川柳次郎（玄耳、1872～1926：新聞記者・文筆家）、白田卯一郎（亜浪、1879～1951：俳人）、林繁夫、三戸十三、角田八平次なども客員顧問であったという。

『日華之実業』誌は、東京・巢鴨で刊行されていたが、これ以外に上海、大連、北京、奉天、山東、長春、福岡、名古屋に支局を置いていた。ただし、これらの支局は別の新聞社内にも場所を借りた場合が多く、また支局長は他の新聞社との兼業であった。たとえば、上海支局監督の西本省三（白川）は、日本語雑誌『上海』の主筆であり、北京支局長の黒根祥作（掃葉）は『新支那』社に所属し、『支那劇精通』（東亜公司、北京、1921年）の執筆や汪精衛著『日

本と携へて』(大阪朝日新聞社、1941年)の翻訳をおこなった人物である。山東支局長の浜岡福松は、満鉄哈爾濱事務所調査課に所属し、多くのロシア、「満洲」関連の著作や翻訳を残している³。長春支局監督の箱田琢磨は、長春の『北満日報』(1910年6月、『長春日報』が前身、1917年改題)社社長である。さらに1920年1月からは京城支局が開設され、谷野満蔵が支局長に就任した(第3巻第5号「社告」)。

『日華之実業』誌は発行期間も短く、また国内の資料館や図書館にもほとんど存在していない。しかしながら、日華之実業社は、政治家や文化人の影響力のもと、大陸駐在の記者と連携しながら、東北アジア情勢に機敏に反応していたといえる。つぎに、雑誌の記事の内容と雑誌社の活動について見てゆくことにしたい。

II 記事の内容、および東方調査団について

『日華之実業』誌には、中国、満洲、シベリア、モンゴル、朝鮮における政治、経済情勢に関する文章が掲載され、シベリア出兵、尼港(現在のニコライエフスク・ナ・アムール)事件(1920年1月)、山東半島の旧ドイツ利権の返還問題、満洲水田問題、極東開発などが取り上げられている。執筆者は、学者、財界有名人、軍人、満鉄・東拓の有力者、客員顧問、本誌記者の名前が見えるが、政治家の記名記事は無断転用や翻訳もあった⁴。これに加え、日本語の論文を漢語訳した文章や漢語の記事が「華文欄」に掲載されたが、実際に購読者がいたかは別として、中国を意識していたあらわれであると考えられる。このほか満鉄、朝鮮銀行、横浜正銀銀行、東洋拓殖株式会社など、当時大陸に進出していた各特殊会社の広告が毎回掲載されている。

さらに日華実業社の活動として興味深いのは、日本のシベリア出兵を契機として、頭山満の賛助のもと東方調査団を主催し、これをシベリアへ派遣している点である。後に作成された「東方調査団要覧」(1923年7月)によると、東方調査団派遣の理由として「帝国の西伯利出兵(大正17年)と同時に東方調査団を組織し東北西伯利に於ける産業利権(森林、鉱業、石油、毛皮、漁業)並に住民の人情、風俗、教育、宗教、商工業、交通の万般に亘る探検調査を為さしむべく毎年数名の団員を西伯利に特派」したことが述べられている。東方調査団は官民有志の補助金を以て組織され、1923年当時、東方調査団本部には、賛助社総代の頭山満、相談役・法学博士・参議院議員の戸水寛人、顧問・衆議院議員の佐々木安五郎、露領顧問・北満通信社長の杉浦龍吉、東方調査団理事長の加藤政吉、尼港支部長理事の堀貞、哈爾濱支部長理事の本田廣、勸察加州担当理事の奥田豊吉らが名を連ねていた⁵。

1919年前半、日華之実業社記者の深谷佐市、古川狄風、田原茂らのほか、鉱山技師の斎藤節郎、農林技師の和田早苗、モンゴル語通訳の葉鏢、ロシア語通訳の木村敏雄などが、東方調査団東露派遣員に選定された。東方調査団の当初の旅行日程は、1919年5月から1920年9月までであり、踏査地域は、「北満洲(吉林省、黒龍江)、東部西伯利(沿海州、黒竜江州、

後貝加爾州、イルクーツク県、サハリン州、カムチャツカ州、ヤクーツカヤ州)、内外蒙古一帯」という壮大な計画であったが、その後大幅に縮小された。

『日華之実業』誌によれば、東方調査団は、1919年8月なかばに東京を出発し、敦賀港を経てウラジオストクに到着した。その後、東方調査団は、現地の駐留軍人の護衛を受けながら、9月初めにウスリー線を利用して列車でハバロフスク方面に出発し、ニコラエフスクでは同地の派遣軍隊長(陸軍歩兵少佐)石川正雅より、物資の援助を受けている。9月15日、ニコラエフスク埠頭を出発し、軍の護衛を受けながら、アムグニ金鉱の調査を行った。その後再びニコラエフスクに戻るが、9月末、結氷が近づいたため終航の便で帰着することとなる。これらの活動内容について、雑誌のなかで東方調査団の特集が生まれ、ウラジオストクやハバロフスクの経済状況、シベリアの金鉱調査に関する記事が掲載されている。その後、ニコラエフスクでは翌年3月の「尼港事件」により、日本軍が壊滅の被害を受けるが、これによせて深谷は「ニコライフスクの回想」(第4巻第6号)を記している。以上のように、東方調査団の活動は、シベリア出兵に合わせて編成され、かつ現地派遣軍の援助を全面的に受けて実施されたもので、とりわけ農林技師と鉱山技師を帯同するなど、シベリアの森林・鉱山開発などに注目するものであった。引き続き東方調査団は、「ヤクーツカヤ州」調査を計画するものの、実現はかなわなかった。外交文書のなかで1920年以降も、東方調査団はサハリンやカムチャッカ半島の土地租借、南洋諸島調査など、日本人にとって、いわば「前人未踏」の地域に着目していたことが記されている。彼らの活動は大きな実を結ばなかったようであるが、『日華之実業』誌の記事は、20世紀前半の東北アジア情勢を巡って、政治家や記者たちが何に注目し、そしてどのように行動していたのかを知るうえで、興味深い論点を我々に与えてくれるといえるだろう。

注

- 1 現在、所蔵が確認されるのは、筆者が所蔵する第3巻2～4、7～10号(1919年)、第4巻1～7号(うち3～5欠、1920年)のみである。雑誌奥書に「謹呈 鏡石青年会御中 古川狄風」とあることから、古川が故郷の福島県須賀川市鏡石町へ寄贈したものではないかと推察される。
- 2 「須賀川市立博物館 古川狄風展」『文化福島』(第185号、1987年5月)。
- 3 井村哲郎編『満鉄調査部－関係者の証言』(アジア経済研究所、1996年)727頁。
- 4 たとえば、第3巻第9号には前月号(8月号)掲載記事「排日問題と其対応策」に対して、林権助から事実と異なる点があるとして、「八月号記事取消文」(1919年8月10日付)が突きつけられている。
- 5 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08051309800「大正13年公文備考 卷136雑件」(防衛省防衛研究所)。なお、第3巻第4号「社告」でも「今や時運ノ要求ニ迫ラレ、率先シテ、茲ニ東方調査団ヲ組織シ、邦人未踏ノ内部ヲ踏破セシメ、隠レタル産業、利源、(森林鉱山)生活状態、人情風俗、教育、宗教、商業、交通等万般ニ巨ル探検調査ノ結果ヲ逐次誌上ニ発表シ、以テ江湖ノ便益ニ資セント欲ス」と記している。

『日華之実業』記事目録

注記：漢字は固有名詞等を除き当用漢字に改めた。また本文の誤字脱字と思われる箇所もそのまま記載している。

第3巻第2号（1919年2月）

題言 雪中梅韻

今の時を如何と観る歎（社説）

侵略主義の殲滅と支那内政整理（前支那公使：林権助）

満蒙経営と朝鮮人保護問題（奉天総領事：赤塚正助）

国際連盟と日支経済関係（山口高商教授：作田莊一）

日支産業提携と原綿問題（法学士：木戸幸一）

八面痛棒

西伯利政府樹立の要（満鉄理事：川上俊彦）

露領亜細亜の森林伐採事業（法学士：野守広）

満洲特産市場の建設問題（鮮銀大連支店長：阿部秀太郎）

西園寺侯と頭辨償

西伯利鉄道管理の急務（今川蓼峰）

慰問号献納寄贈記（記者・餐霞生）

西伯利視察雑感（東拓参事：鈴木重治）

満蒙鉞山と悲楽観説（満鉄理事：樺山資英）

上海に於ける漢字新聞の内面（白露生）

同人伊勢参宮記

太平洋横断記（黒潮浪客）

文苑（結城蓄堂選評）

—華文版—

日本現内閣之施政方針（内閣総理大臣：原敬）

国民党之対議会方針（立憲国民党総理：犬養毅）

日本対華外交方針（外務大臣：内田康哉）

戦後之自給主義与思想的道破（侯爵：大隈重信）

日華親善之根本義（文学博士：柳澤政太郎）

強国之根本対策与工業教育（工学博士：青柳栄司）

中国電気事業之将来（法学士：三宅福馬）

中国可為有望之綿花国（朱普遜述）

満洲事業界紹介

第3巻第3号 (1919年3月号)

題言 鎌を手にして

駐日中華留学生を優遇せよ (社説)

覚醒せる相互提携の要—工業立国と原料問題— (法学博士: 添田籌一)

工業原料と日支経済提携 (商工局長: 鶴見左吉雄)

日支合辦事業の通弊と其発展 (東京高等商業学校教授: 根岸信)

普通選挙の要諦 (尾崎行雄)

欧州戦後の東洋民族の覚悟及要求—人類平等と軍国主義の打破— (北京大学文科学長: 陳独秀)

経済上より観たる満洲漁業 (慶応義塾大学講師: 清水静文)

八面痛棒

鉄鉱石炭の自給と支那開発—利権獲得と商取引の見解— (製鉄所参事・法学士: 田島勝太郎)

噫板垣自由伯 (人物印象記)

南支那視察雑感 (朝鮮銀行奉天支店長: 小西春雄)

日華製革業の需給関係 (日本皮革株式会社技師: 松尾靈彦)

南満洲と水田事業 (奉天支局: 一記者)

西伯利亚の人種及風俗 (参謀本部嘱託: 酒巻鷗公)

反動的経済界と社会心理 (今川蓼峰)

西伯利亚と欧亚大陸—西伯利の開放と調査機関設置、吾人は各大陸の開放を希望する—
(北京: 安藤万吉)

堪察加及西伯利亚の鉱業状態 (本社調査局調査)

哈爾濱より (万三千峰)

余は何故に中華学生優待に五十万円を投じたるか (実業家: 望月軍四郎)

憶超す二烈士の倂 (易水散史)

南満洲製糖と西伯利亚発展 (前南満製糖会社専務取締役: 橋本貞夫)

有望なる満蒙毛織会社 (奉天支局長: 田原天牛)

文苑

—華文版—

対於日華貿易我之中日親善主義観 (趙毅夫)

日華経済的単一同盟之必要 (東京帝国大学教授・法学博士: 吉野作造)

日華関税同盟論 (高柳松一郎)

極東之将来与日本之態度 (講和委員・男爵: 牧野伸顯)

満鮮中華経済状態 (美濃部俊吉)

満洲業界紹介 (正隆銀行 [大連]、遼東銀行、大連取引所信託会社)

第3巻第4号（1919年4月号）

題言 桜咲く頃

社説 対満方針に就て

満洲里より（愛香生）

八面痛棒

支那開発と根本的改善—我国朝野の覚悟を促す—（男爵：洪沢栄一）

製鉄用石炭と其補給—意見の発表は慎重なれ—（工学博士：和田維四郎）

日支経済提携と合辦事業（法学博士：田中穂積）

工業の将来と国家的整理の必要（工学博士：加茂正雄）

鉄道界の権威久保要蔵氏と語る（一記者）

支那の開発と鉱業借款の利害（ブレナンソー）

我邦に於ける石炭事業の将来（法学博士・男爵：伊藤文吉）

都市政策と市場問題（早稲田大学教授：阿部磯雄）

日露漁業協約とオコツク海—政府当局の猛者を促す—（代議士：奥田亀造）

支那工業状態と其経営策—商工業視察談—（法学士：河合良成）

日支貿易と日支親善主義（中華興業公司総経理：趙毅夫）

大砲遞相（人物印象記）

支那に演ぜらるべき資本戦争（今川蓼峯）

支那の工業と製鉄問題（東京鉄工機械同業組合副組長：大塚常吉）

雲南より（雲南領事館：二瓶兵二）

本社調査局資料 支那船業の現在及将来（本社調査局）

後貝加爾洲の経済的将来と移民との関係（レベデフ氏述）

山東に於ける帝国官民の用意（青島軍司令官陸軍中將：大島健一）

愛新覚羅の靈跡と国境（深谷松濤）

蒙古の喇嘛生活（古川狄風）

青島守備軍司令部に向原参謀長を訪ふ（奉天支局長：田原天牛）

青島港の経済的価格（三井物産会社青島支店長：飯塚重五郎）

文苑 漢詩（結城蕃堂選評）

—華文版—

人種差別撤廃之合理的解決（侯爵：大隈重信）

中国鉄道之将来与国際管理問題（衆議院議員：一宮房次郎）

対華投資之障碍（嘉列）

関東都督府改為関東庁之官制

鉄鉱及煤炭の将来与対華交易（製鉄所参事・法学士：田島勝太郎）

日本議会中立議員経済論（傍聴記者）

紹介満蒙実業（東洋拓殖株式会社）

列国之対華新策中国鉄道之国際管理（一記者）

第3巻第7号（1919年7月）

巻頭 山社鵬初鯉（題言）

支那排日運動の帰決（社説）

日支親善と経済的国境撤廃—投資の捷徑と都市公共事業—（農商務大臣：山本達雄）

将に出発せんとする東方調査団に望む（法学博士：戸水寛人）

民族的発展と極東開發—食料問題と西伯利移住—（軍中將：堀内文次郎）

排日と外交の決算（男爵：渋沢栄一）

新借款団の出現と日支両国の態度（法学博士：小林丑三郎）

我对露政策と西伯利開發—露国々民性研究の要—（外国語学校長：鈴木於菟平）

西伯利開發と我國民の自覚（貴族院議員：鎌田栄吉）

噫名府尹（人物印象録）（編輯子）

四国借款団の成立を難ず（法学博士：堀江帰一）

日本觀の三變遷（中華民國代理公使：莊璟珂）

新借款団問題と帝国（森恪）

浮世古事記（編笠浪人）

日貨排斥と日支親善（陸軍歩兵中佐：町野武馬）

支那に対する米国の大計画（米商會會議所會頭：バロールド グラー）

支那文学と写実（深谷子）

滿洲千山（古川狄風）

支那のいろいろ（松山人）

天下之絶勝朝鮮金剛の四季（蓼峰：今川宇一郎）

鴨緑江採木公司に大津參事を訪ふ（奉天支局長：天牛生）

文苑 漢詩（結城蕃堂選評）

—華文欄—

国際連盟成立与其効果（法学博士：松波仁一郎）

宣反对借款団（大石正巳）

滿蒙富源之開拓方面（慶応大学教授：清水静文）

中国幣制改革論（法学士：村田俊彦）

調査中国硝石記（陸軍砲兵中佐：川崎吉五郎）

以勘察加为中心之西伯利沿海之水産物（一記者）

西伯利交通小史

紹介満蒙実業（東洋拓殖会社十年史、中日合弁事業之魁鴨緑江採木公司、前途有望之滿蒙織

維工業会社日陞公司)

第3巻第8号(1919年8月)

巻頭 和平二百卅年(題言)

国際連盟を侮辱せんとする歎(社説)

世界思想の勃興と教育的日支親善(前文部大臣・法学博士:高田早苗)

排日問題と其対応策(関東庁長官・男爵:林権助)

米国より帰りて(子爵:石井菊次郎)

国民生活の脅威と一大危機—物価調節の四大方策—(憲政会総務:浜口雄幸)

支那識者の三省を望む(法学博士:大場茂馬)

杉山其日庵主(人物印象録)

西伯利に対する経済的發展(ドクトル オブ フィロソヒー:長瀬鳳輔)

大勢順応と大義宣明(照山 佐々木安五郎)

英米新聞対支論調(編輯子)

浮世古事記(編笠浪人)

支那と国民的意識の転換(文学博士:遠藤隆吉)

日支経済同盟に就いて(東京商業会議所会頭:藤山雷太)

警世余録(飛魚漁郎)

経済調節の二大根本義—通貨収縮と新領土米作振興—(男爵:大倉喜八郎)

東亜保全の理想と日支親善(貴族院議員、男爵:田健次郎)

世界の新経済と日支両国(堀越商会主:堀越善重郎)

肅親王を訪ふ(一記者)

天下の絶勝朝鮮金剛の四季(今川宇一郎)

背広姿の林長官と詰襟姿の杉山総長(一記者)

安東の一日(奉天支局長:田原天牛)

騒擾より内閣辞職まで—支那暴動日誌—

文苑 漢詩(結城蕃堂選評)

—華文欄—

世界之大勢与日華経済同盟(法学博士:戸水寛人)

人権問題与東洋対西洋(萬朝報社長:黒岩周六)

中国米輸出解禁問題(法学士:吉田虎雄)

講和之諸問題(男爵:田健次郎)

講和与新思潮(国民党総理:犬養毅)

連盟与特殊協約(貴族院議員:江木翼)

世界大勢与日米関係(永井柳太郎)

東洋拓殖会社十年史
満洲皮革株式会社

第3巻9号（1919年9月）

巻頭 穂は実れるに

露国極東政府を如何にする歟—コルチャツ提督及我朝野に致す—（社説）

東洋に国を樹てんとする新青年—対支対南洋産業戦来る—（内務大臣：床次竹次郎）

再び新四国借款団の出現に就て（法学博士：小林丑三郎）

東洋の前途と海軍力（海軍大臣：日高謹爾）

我対支政策の根本方針（法学博士：田中華一郎）

日華親善に対する予の希望（駐日代理公使：莊璟珂）

大隈無言侯（人物印象記）

満蒙除外と青島居留地問題（森恪）

満蒙除外は当然なり（代議士：小寺謙吉）

浮世古事記（編笠浪人）

米価問題と通貨収縮の要—更に開墾を奨励すべし—（日本石油会社長：内藤久寛）

最近対露貿易と本邦商品—烏蘇里沿線貿易事情—（外務省事務官：伊東亮一）

咄々物語（天牛生）

孫文学説（序説）（前中華民国大総統：孫逸仙）

山東問題と日米関係（一記者）

天下の絶勝朝鮮金剛の四季（今川宇一郎）

—満蒙及び西伯利に活動せる東方調査団記事—

東京出発まで

東京駅より敦賀迄

敦賀より浦鹽まで（第一信：東方調査団員 古川狄風）

浦鹽にて（第一信：東方調査団長：深谷松濤）

新に見たる浦鹽の現状（第一信：東方調査団員：田原天牛）

浦鹽は玉葱と西瓜が大歓迎（東方調査団技師：和田耕月）

西伯利金山の廢抗と其再興策—邦人資本家との提携を待つ—（東方調査団技師：斉藤節郎）

文苑（結城蕃堂選評）

—華文版—

世界思想之勃興与教育的日華親善（前文部大臣法学博士：高田早苗）

日華親善与教育制度の完備（工学博士：青柳栄司）

山東政策之声明（外務大臣：内田康哉）

山東還付声明（外務次官：幣原喜重郎氏談）

日華両国之原料供給状態比較（農商務省臨時産業調査局：吉田虎雄）

戦乱与東亜商業之大勢（米国亜細亞雜誌所載、本誌記者訳）

西伯利亚之実況（本社調査局調査）

対俄政策（侯爵：大隈重信）

第3巻第10号（1919年10月）

巻頭 我二十倍余

噫果して此人の言歟—山東問題と米大統領の遊説—（上）（社説）

我对支政策の根本方針（大石正巳）

対食糧政策（首相：原敬）

日本は民国の条約改正を援助すべし（中日実業公司副総辦：倉知鉄吉）

新借款団と我对支経済政策（法学博士：河津暹）

雪の西伯利へ（西伯利大使：加藤恒忠）

日支親善と個人的理解（理学博士：小川琢次）

斎藤新総督（人物印象録）（編輯子）

哈府地方の経済状態—日貨の批判と有望商品—（外務事務官：伊東亮一）

浮世古事記（編笠浪人）

孫文学説（在上海：孫逸仙）

排日問題と我对支政策（東亜通商専務：高木陸郎）

西伯利の在住鮮人と排日熱（哈府にて：深谷佐市）

—滿蒙及び西伯利に活動せる東方調査団記事—

浦塩の経済金融状態（東方調査団理事：田原天牛）

（キリストのお里調べ 佐々木照山氏 談）

浦塩よりハヴロフスク迄（東方調査団長：深谷松濤）

西伯利視察雜駁（東方調査団技師：斎藤節郎）

（巡蒙瑣談 田中捨身）

俘虜収容所を觀る（東方調査団員：古川狄風）

我国より西伯利に輸入する農産品（東方調査団技師：秋田甲月）

烏蘇里線付近の諸鉞山（東方調査団技師：斎藤節郎）

浦塩より哈爾濱まで（ハルピンにて：田原天牛）

旅行奇談 革命家の娘（林学博士：本多静六）

文苑（結城蕃堂選評）

—華文版—

講和會議与日本之立場（日本講和大使・侯爵：西園寺公望）

講和与対華外交之批評（子爵：加藤高明）

大勢順応与大義宣明（照山 佐々木安五郎）
西伯利亚之大勢（陸軍中佐：井染禄郎）
西伯利亚貿易前途之有望（農商務省囑託：松尾音次郎）
戦後之産業復旧問題（深井英五）
大連商埠之価値（一社員）
満蒙除外之真諦（匿名隠士）

第4巻第1号（1920年1月）

卷頭 年頭之辞

支那の過激化と我宣伝運動—国家的宣伝の急務—（社説）
極東に於ける帝国の使命—平和的文化政策の徹底—（内閣総理大臣：原敬）
純東洋文化の宣伝と帝国—泰西文化破産の救済策—（枢密顧問官：一木喜徳郎）
東洋平和の基礎要件（法学博士：浮田和良）
海神東郷元帥（人物印象記）（編輯子）
—改造問題と帝国の将来—
改造後の世界と帝国—噫—等国民の実ある歟—（侯爵：大隈重信）
世界の改造と日本の改造（法学博士：山脇玄）
国際連盟の二大疑義—帝国憲法との関係—（憲政会総務：江木翼）
世界改造と日支両国の将来（代議士：長島隆二）
日英同盟の改訂（陸軍中將：楠瀬幸彦）
—対支対米問題—
日支提携と我对支發展—国民外交と支那開發策—（男爵：洪沢栄一）
対支投資と支那鉄道（工学博士：大屋権平）
日支関係の現状に就て（政友会総務：小川平吉）
支那視察所感（代議士：古島一雄）
対米策及対支政策（代議士：望月小太郎）
米国の対支投資と妄論—猜疑論は迂愚の極也—（慶大教授：板倉卓蔵）
—対労働政策—
労働組合所見（内務大臣：床次竹次郎）
労働會議に於ける我主張の可否（法学博士：河津暹）
労働問題と労働組合（政友会総務：三土忠造）
新年漫録 猿数題（編笠浪人）
剪灯夜話 赤襦袢翁（何の某）
—対選挙問題—
選挙界廓清策（憲政会総務：安達謙蔵）

- 普通選挙に関する私見（法学博士：大場茂馬）
屠蘇畸言（松の舎主人）
支那のお正月（松濤山人）
日露合併事業と対露貿易（外国語学校教授：鈴木於菟平）
貿易の将来と我貿易政策（法学博士：津村秀松）
文苑（結城蓄堂選評）
—西伯利活動の東方調査団記事—
西伯利調査記—ニコラエウスクよりアムグニ金山まで—（東方調査団長：深谷松濤記、東方調査団員：古川狄風画）
屠蘇畸言（松の舎主人）
外交秘史 カイゼルの居間（巴里エム氏手記・日本南山小史訳）
光秀忌（南俠助）
白鬚の杜（夜球光楼客）
史談 陸奥後日譚（対話）（白雨山人）
神后征韓の裏面史（雲濤窟生）
—華文欄—
日本帝国在極東使命（内閣総理大臣：原敬）
日華兩國之共同経営（文部大臣：中橋徳五郎）
日華存亡之危機（文学博士：柳澤政太郎）
新借款与対華政局（法学博士：千賀鶴太郎）
日華合併事業之根本的考察（法学博士：塩澤昌貞）
論支那国民的自覚（帝大助教授：宇野哲人）

第4巻第2号（1920年2月）

- 巻頭 口覆と変態思想
徐樹錚と米国外蒙経略と日英仏の態度—（社説）
日支両国民の反省を促す（文学博士：澤柳政太郎）
極東盟主の責任（貴族院議員：仲小路廉）
世界の大勢と日支経済提携（東京商業会議所副会頭：山科礼三）
世界の趨勢と帝国の急務（憲政会総務：尾崎行雄）
紀州頼倫候（人物印象記）（編輯子）
日支親善の要諦（慶応義塾塾長：鎌田栄吉）
支那の商業道徳に就て（文学博士：服部宇之吉）
戦後世界の経済状態（八木武三郎）
社会的国民性の改造（陸軍中将：佐藤鋼次郎）

満蒙開発私見—満蒙の富源— (前承) (旭藤市郎)

静岡より一筆 (編笠浪人)

俚諺釈名 (何の某)

東洋と南米の貿易

—西伯利活動の東方調査団記事—

本団のヤクーツスカヤ州入を宣す (東方調査団々長: 深谷佐市)

西伯利第一のアムグニ金鉱の実況 (東方調査団技師: 斎藤節郎)

黒龍州「ブレーヤ」河流域の鉱山

廃坑となれる後貝加爾州の銀鉛鉱山

文苑 (結城蕃堂選評)

—華文欄—

対華投資と中国鉄道 (工学博士: 大屋権平)

日支親善と個人的理解 (理学博士: 小川琢次)

青島専管租界問題 (法学博士: 吉野作造)

日本行政方針 (首相: 原敬)

日本外交方針 (外相: 内田康哉)

第4巻第6号 (1920年6月)

巻頭 万斛の溜飲を下げしめよ

西伯利の現状と東方調査団の使命—遠征の途に上るに臨みて— (東方調査団々長: 深谷佐市)

南北和平と排日運動—山東問題に対する誤解— (外務大臣: 内田康哉)

中日両国の使命 (中華民国大總統: 徐世昌)

我対支方針と留学生問題—対華主要施設の一— (侯爵: 小村欣一)

支那国民の通弊と我対支外交 (文学博士: 桑原隲蔵)

財界の前途は悲観を要せず (日本銀行副総裁: 木村清四郎)

支那学生の妄動 (男爵: 大倉喜八郎)

秋山將軍の墓前にて—人物印象詩 (編輯子)

西伯利画報 (古川狄風)

研究発見 東洋か西洋か (不盡生)

華人の驚記 (松山人)

支那の演劇と音楽 (東京商業会議所副会頭: 山科礼三)

ニコラエウスキの回想—同胞一千の盡滅せる死の港— (深谷松壽)

満蒙開発私見 (旭藤市郎)

混沌たる支那の政局—醒め来れる青年学生— (北京: 掃葉盧主人)

排日と其対応策 (済南: 浜岡清壽)

八面痛棒

朝鮮に朝鮮通少し（京城支局：南山生）

沿海州に於ける支鮮人の小作問題（本社調査局調査）

東蒙寒中行（遼陽生）

支那の組合制度（山口高等商業学校教授：田中保平）

文苑（結城蓄堂選評）

—華文版—

日華協同国防論（陸軍中將：佐藤鋼次郎）

中国財政上新福音与根本整理（安藤不二雄）

日本遊賞地（成蹊）

第4巻第7号（1920年7月）

巻頭 尼港対策如何

尼港問題と善後策（東方調査団長：深谷松壽）

支那の和平統一に就て（法学博士：戸水寛人）

海外発展と対外機関の創設（台湾総務長官・法学博士：下村宏）

支那国民性の一面（文学博士：宇野哲人）

満洲財界の現状（朝鮮銀行東京支店長：阿部李太郎）

日本人諸君に告ぐ（ヴァンダーリップ）

予の觀たる日本の国情（北京：淵泉）

混沌たる支那の貨幣制度（東京商業會議所副会頭：山科礼三）

日英同盟の更新と其の必要（ゼー ラッセル ケネデー）

日英同盟の更新と支那の態度（一記者）

対支借款の法律關係（一）（法学士：広津政二）

支那鉱産物の現在及将来（農商務省囑託：吉田虎雄）

八面痛棒

西伯利画報（古川狄風）

支那蚕糸業視察談（法学士：河合吉成）

日豪貿易の現在及び将来（シドニー駐在帝国総領事：清水精三郎）

支那の生糸及び製茶貿易（朝鮮銀行東京支店：調査部調査）

ニコライフスク回想録（二）（東方調査団長：深谷松壽）

文苑（結城蓄堂選評）

—華文版—

官尊重中華国民之愛郷心（法学博士：浮田良民）

中国々民之通弊与日本対華外交（文学博士：桑原隲蔵）

日本対華方針与留学生問題（侯爵：小村欣一）

中華民国之借款政策（東京高等工業学校教授：泉哲）

日本遊賞地（成溪）